

配合飼料価格に影響を及ぼす穀物相場の動向について

飼料生産部 飼料調達課 米山 洋

各原料の近年の動向をデータ等を用いて紹介致します。

いたエタノールの生産が回復しております。

表2 エタノールへ使用されるトウモロコシの数量
(引用：6月米国農務省発表のデータより作成) (単位：百万t)

2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
142	137	123	127	137

1. トウモロコシ

(1) 中国の需要増加(米国からの大量輸入)

中国は食文化の変化により、近年食肉の需要量が右肩上がり増加しております。特に養豚用配合飼料の生産量が増加し、その原料となるトウモロコシ・大豆粕が自国の生産だけでは賅いきれない状況にあります。豚肉を中心とした生産が増加傾向にあり、配合飼料の需要が急激に伸び始めております。そのため、'11年以降徐々に米国からのトウモロコシの輸入量が増加しており、'20年、'21年産から急激に増加しております('20年、'21年 各26百万t)。

(2) 米国内バイオエタノールの回復

コロナ禍からの経済回復を受け、これまで停滞して

(3) ウクライナ軍事侵攻による需給懸念など

今年の2月以降、ロシアによるウクライナ軍事侵攻が穀物の輸出数量減少に繋がるという懸念や今年の米国の作付け遅延による生産量減少懸念が相場上昇の要因となっております。

2. 大豆粕

米国でバイオディーゼル向け大豆油需要が伸びていることで、副産物の大豆粕発生量が増加していることから、大豆粕のシカゴ定期価格(米国内の取引所が指定した場所での受渡しを基準とした先物取引価格)

表1 中国のトウモロコシ需給(米国農務省2022年7月12日発表)

(単位：百万ヘクタール、百万トン)

年度	収穫面積	単収	期首在庫	生産量	輸入量	供給計	飼料需要	食品工業他	輸出货量	需要計	期末在庫	在庫率
7/8	30.0	5.2	36.6	155.1	0.0	191.8	111.0	44.0	0.5	155.0	36.2	23.4%
8/9	31.0	5.6	36.2	172.1	0.0	208.4	119.0	45.0	0.2	164.0	44.2	27.0%
9/10	32.9	5.3	44.2	173.3	1.3	218.8	129.0	47.0	0.2	176.0	42.6	24.2%
10/11	35.0	5.5	42.6	190.8	1.0	234.4	139.0	52.0	0.1	191.0	43.2	22.6%
11/12	36.8	5.8	43.2	211.3	5.2	259.8	147.0	57.0	0.1	204.0	55.7	27.3%
12/13	39.1	5.9	55.7	229.6	2.7	288.0	151.0	56.0	0.1	207.0	80.9	39.1%
13/14	41.3	6.0	80.9	248.5	3.3	332.6	151.0	58.0	0.0	209.0	123.6	59.1%
14/15	43.0	5.8	123.6	249.8	5.5	378.9	144.0	62.0	0.0	206.0	172.9	83.9%
15/16	45.0	5.9	172.9	265.0	3.2	441.0	165.0	64.0	0.0	229.0	212.0	92.6%
16/17	44.2	6.0	212.0	263.6	2.5	478.1	185.0	70.0	0.1	255.0	223.0	87.5%
17/18	42.4	6.1	223.0	259.1	3.5	485.5	187.0	76.0	0.0	263.0	222.5	84.6%
18/19	42.1	6.1	222.5	257.2	4.5	484.2	191.0	83.0	0.0	274.0	210.2	76.7%
19/20	41.3	6.3	210.2	260.8	7.6	478.5	193.0	85.0	0.0	278.0	200.5	72.1%
20/21	41.3	6.3	200.5	260.7	29.5	490.7	203.0	82.0	0.0	285.0	205.7	72.2%
21/22	43.3	6.3	205.7	272.6	23.0	501.3	209.0	82.0	0.0	291.0	210.2	72.2%
22/23	43.0	6.3	210.2	271.0	18.0	501.3	214.0	81.0	0.0	291.0	204.2	72.2%

は下落しております。しかしながら、日本の大豆粕の主要な輸入元である中国でコロナ感染が拡大し、大豆の搾油量が減少したことにより、中国産大豆粕の発生量が減少したこと、さらに日本が原料産地を南米などへシフトしたことにより、輸送費用が大幅に増加したことが原因し、日本国内の大豆粕相場は上昇しております。

3. 大麦

カナダでは干ばつによる減産が影響し、供給のひっ迫から産地価格が上昇しております。加えて、ロシアの軍事侵攻によるウクライナ産の輸出制限も相場の上昇の要因となっております。

表3 世界の大麦の生産量（引用：6月米国農務省発表のデータより作成）

		統計年度（9月～8月）					22/23年の 前年差
		18/19年	19/20年	20/21年	21/22年	22/23年	
生産量 (百万 t)	米国	3	4	4	3	4	1
	中国	2	2	2	2	2	0
	豪州	9	10	13	14	11	-2.7
	カナダ	8	10	11	7	11	4
	EU-28	49	55	54	52	52	-0.272
	ロシア	17	20	21	18	20	2
	ウクライナ	8	10	8	10	6	-4.223
	その他	43	47	47	40	43	2.52
	世界合計	140	158	159	145	147	2.251
消費量 (百万 t)	世界合計	141	157	161	149	147	-1.369
期末在庫 (百万 t)	世界合計	20	22	20	17	17	0.092
在庫率(%)	世界合計	14.3	13.9	12.6	11.3	11.5	0.2

‘21年産のウクライナの大麦輸出量はカナダに次いで世界第二位です。ところが‘22年産のウクライナの前年（10百万トン）に比べ、約4百万トンの減少が予測されています。さらに、アフリカ・中東諸国等、今までウクライナ産を主体に輸入していた国では国内在庫が無い場合、豪州産へシフトして買付することが予測されます。これらのことが、豪州産大麦の価格が上昇する要因となっております。

4. 小麦

米国・カナダの干ばつの影響に加えて、中国や東南アジアの飼料用小麦需要が堅調であることから、需給のひっ迫により産地価格が上昇しております。

表4 世界的小麦の生産量（引用：6月米国農務省発表のデータより作成）

		統計年度（9月～8月）					22/23年の 前年差
		18/19年	19/20年	20/21年	21/22年	22/23年	
生産量 (百万 t)	米国	51	53	50	45	47	2
	中国	131	134	134	137	135	-1.946
	豪州	18	14	33	36	30	-6.3
	カナダ	32	33	35	22	33	11
	EU-28	123	139	127	138	136	-2.318
	ロシア	72	74	85	75	81	6
	ウクライナ	25	29	25	33	22	-11.507
	その他	278	287	286	293	290	-3.191
	世界合計	731	762	776	779	773	-5.6
消費量 (百万 t)	世界合計	734	746	782	791	786	-5.22
期末在庫 (百万 t)	世界合計	282	298	292	279	267	-12.553
在庫率(%)	世界合計	38.5	40	37.3	35.3	34	-1.4

5. 長期的な今後の行方

飼料原料事情に影響する主な穀物（トウモロコシ・大豆・小麦・大麦）の年間消費量は約26億万トンで大きな変動はありません。これまでは飼料原料価格へ影響を及ぼす要因は、天候の影響による収穫量の増減やエタノール等、飼料用途以外の需要の増加でした。

しかし、現在はロシアによるウクライナへの軍事侵攻により、供給計画に変化が見えてきております。ロシアとウクライナの2国で小麦は世界の生産量の約13%、大麦は約18%を占めております。特にウクライナの大麦の輸出量は世界第2位であることから、この先ウクライナでの生産量の減少や経済封鎖の影響が出れば、これまでウクライナから輸入していた国は他の国から食糧を調達することになり、相場を吊り上げる大きな要素となることが想定されます。ウクライナの前年産の生産量が減少すれば、アフリカや中東諸国等、従来飼料としてではなく人が食べる食糧として輸入していた国は食糧不足を招くこととなります。そうなれば、飼料原料として流通していた穀物の量が減少することで、相場が押し上げられる可能性は否めません。

配合飼料原料のほとんどが輸入による穀物を使用しているため、今後も各原料の穀物相場に影響されることから、配合飼料価格も今のレベルで推移するか予測が付きませんが、当社と致しましては、今後も品質の安定した配合飼料の製造、販売に努めてまいりますので引き続きご愛顧の程、宜しく申し上げます。